

自称悪役令嬢な
妻の観察記録。2

しき
Shiki

RB

レジーナ文庫



登場人物 紹介

イズラーチ

シーヘルビー国の第二王子。婚約者であるジューンとの仲を深めるべく、奮闘中。

クロ

パーティアと契約している精霊。黒狐や少女メイドに擬態している。

ジューン

シーヘルビー国の伯爵令嬢で、イズラーチの婚約者。パーティアが前世で読んだ小説の主人公。

アレイス

シーヘルビー国の王弟かつ現王太子。国の決まりで、いずれは王太子の地位を失う。

リソーナ

ウミューベ国の王女で、アレイスの婚約者。パーティアが前世で読んだ小説では『悪役令嬢』として登場。

ゼノ

セシルと契約している精霊。普段は侍従としてそばに控えている。

ラムタク

シーヘルビー国の第一王子にして、次期王太子。アレイスのことを敵視している。

パーティア

セシルの妻にして、アルファスタ国の王太子妃。現在は『代理悪役令嬢』となるべく奮闘中。

セシル

アルファスタ国の王太子。頭脳明晰すぎて退屈だった日々を変えてくれたパーティアを大切にしている。

目次

自称悪役令嬢な妻の観察記録。 2

書き下ろし番外編

バーティア、お悩み中。

自称悪役令嬢な妻の観察記録。

2

一 パーティア結婚式参列五日前

「もうすぐ始まるね。なんとか準備が間に合ったようだ」

「はいですの！ 私も皆様も頑張りましたわ！」

目の前に広がる光景に満足げに笑う妻パーティア。その表情を見て、アルファスタ国の王太子である私、セシル・グロー・アルファスタはつられるように微笑んだ。

……それにしても、私たちは確か結婚式の演出と出席を頼まれただけのはずなんだけれど、一体なぜこんなことになっているんだろう？

私自身も多少協力しているとはいえ、いろんなことに意欲的すぎる妻がいなければ絶対に陥らないであろう状況だ。

私は内心苦笑しつつ、こしばらくの出来事を振り返った。

自分は『乙女ゲーム』の悪役令嬢だと言い張り、『ギャフン』されようとしていた私の婚約者パーティアを、あの手この手で言いくる……守り抜き、妻にしたのは今年の春

のことだ。

私たちの結婚式は、妻の希望をなるべく叶えようとした結果、かなり革新的なものになったが、参列者の評判はとても良かった。

そしてその結果、私たちの結婚式に参列し、パーティアと仲良くなったウミューベ国のリソーナ王女から、自分の結婚式の演出をしてほしいという依頼がパーティアに舞い込むことになったのだ。

友人を大切にするパーティアがそれを無下にするはずもなく、さらに国益に繋がるということもあって、その依頼を受けることになった。

その後、花嫁のためのドレスをデザインしたり、お祝いのためのお酒としてニホン酒を造ったりと様々な準備をして、ついに私たちはリソーナ王女の嫁ぎ先であるシーヘルビー国を訪れた。

ここまでくれば、後は式の演出の最終調整や打ち合わせをする程度で、滞在先にと用意された離宮で結婚式当日までのんびり過ごせばいいはずだった。

ところが私の妻は突然、リソーナ王女が前世で読んだ『小説』に出てくる悪役令嬢だと言いつ出した。そして、このままだとリソーナ王女は、結婚相手であるシーヘルビー国の現王太子で、王弟でもあるアレイス王太子と冷めきつた結婚生活を送ることになると

いう。さらにその状況に鬱憤^{うっふん}を溜めた彼女は、幸せそうな第二王子のイズラーチ王子とその婚約者であるジューン嬢を妬み^{ねた}、二人の仲を引き裂こうとする。そして最終的にジューン嬢を物理的に傷付けようとして生涯幽閉されることになるらしい。

……正直言えば、私にとってはどうでもいいことだった。

パーティーアも、その『小説』の内容は、私たちと直接的には関わりがないと言っていたしね。

ただ、人一倍お人好し^{ひとよ}で優しくてお馬鹿で……暴走しやすい妻が、大切な友人が不幸になるとわかっていて大人しくしているはずがなかった。

自分がリソーナ王女の代わりに「代理悪役令嬢になる！」と宣言した挙句、いつも通り様々な作戦……もとい面白い暴走を繰り広げ始めた。

こうなると私も放つてはおけず、観察して楽しみつつも、情報収集をしたり、軌道修正してトラブルが起らないように調整したりした。

……まあ、私の妻は根っからのお人好し^{ひとよ}だから、私が何かするまでもなく、元々たいした『悪役令嬢』活動もできず、頑張つてやったこともことごとく失敗した上に、虐め^{いじめ}る対象だったジューン嬢に懐かれていたけどね。

そんな感じで、のんびりどころか慌ただしい日々を送っていたのだけれど、パーティー

アが今度はリソーナ王女の立場を安定させるために少しでも交友関係を広げてあげたい、ついでには結婚式の参列者を招いてお茶会をしてはどうかと言いつ出した。

それがつい先日のことだ。

そして、リソーナ王女の結婚式まで残り五日となった今日。

リソーナ王女とパーティーアが協力して準備したお茶会が開催されることとなったのだ。他国から招かれた参列者は皆、結婚式に遅れないように余裕を持ってシーヘルビー国を訪れている。

そのため、五日前ともなれば主だった国の参列者たちはおおむね揃っている。それも考慮して、この日を選んだのだろう。

ちなみに、本来なら結婚式の準備が大詰めとなるこの時期にこんなイベントを急遽開催するのはとても大変なことなんだけど、そこはシーヘルビー国の皇太后と王妃の協力のおかげでなんとかなったようだ。

これはお二人に協力を求めるようにという私の助言のおかげだと、先日パーティーアを通じてリソーナ王女から感謝の手紙をもらった。

そんなことを思い出しているうちに、ついにお茶会開始の時が訪れた。

「皆様、この度は私たちの結婚式のためにシーヘルビー国までご足労くださり、感謝申

し上げます。結婚式まではまだ少々時間がありますが、私の友人であるアルファスタ国のバーティア王太子妃様のご提案で、本日、ささやかではありますが交流の場を設けさせていただきます」

「皆様との交流の場が欲しいという私の我儘を、リソーナ王女様をはじめ、シーヘルビー国の方々が快く了承してください、この会を開くことができました。本当にありがとうございます。こうして皆様とゆつくりと話せる機会ができたことをとても嬉しく思いますわ」

お茶会は、リソーナ王女とバーティアの挨拶から始まった。二人は前に立ち、会場にいる人を見渡すようにして笑顔で話す。

正式なお茶会とは違い、急遽用意した簡単な交流の場だから、始まりの挨拶も短いものだ。

私とアレイス王太子は二人の隣に立ち、彼女たちのエスコート役に徹していた。

……大変な時期に頑張つてこういった場を作ったのは彼女たちだからね。花を持たせてあげないと。

バーティアたちに協力してくれた皇太后と王妃も、私たち用に用意されたテーブルを挟むように、左右に分かれて設けられた特別席に腰かけている。

皇太后と王妃は互いの取り巻きを自分のテーブルに座らせ、バーティアとリソーナ王女を見て穏やかに微笑んでいた。

バーティアたちは皇太后と王妃に開宴の挨拶を譲ろうとしたらしいけど、お二人は辞退し、バーティアたちがするようにと言ったらしい。

「それでは皆様、短い時間ではありますがお楽しみくださいませ」

リソーナ王女が挨拶を締めくくると同時に、私たち四人でお辞儀をする。

会場から拍手が上がり、お茶会が始まった。

開始早々、リソーナ王女とアレイス王太子は皇太后のところへ、私とバーティアは王妃のところへ向かう。

お茶会の準備に協力してくれたことに対してお礼を言うためだ。

このお茶会は、折角だから他国の方々と交流を持ちたいというバーティアの希望を友人のリソーナ王女が受け入れて、皇太后と王妃に助力を願い、開催された——という形になっている。

そのためお茶会が実現した今、すぐに皇太后と王妃に直接お礼を言いに行く必要があるのだ。

私たちは事前に打ち合わせをし、どちらかを優先したという形にならないように、そ

れぞれ別の相手にお礼を言いに行き、その後、もう一方にお礼を言いに行くことにした。皇太后も王妃も今回のお茶会が交流を目的としているものだと理解していたため、主催者である二人が自分たちとの挨拶で時間を取られすぎないようにと、お礼の挨拶もあつという間に終わらせてくれた。

その代わり、お茶会の後半、挨拶回りなどが落ち着いてきた頃合いを見計らってゆつくりと皆で話をしようということになった。

この辺は、事前に皇太后と王妃の間で話がついていたらしく、皇太后と王妃、どちらからも『皆で』と声をかけられた。

この『皆』というのは、皇太后、王妃、リソーナ王女たち、そして私たちという意味だ。

まあ、確にお茶会の時間は限られているし、このほうが効率的だろう。

彼女たちもリソーナ王女たちと私たちを別々に呼ぶよりも時間を短縮できるし、その時間を他の人たちとの交流に使える。

お互いにメリットのある話だ。

「セシル様、お菓子もいっぱい準備しましたの！ セシル様好みのあまり甘くないものや軽食なんかもありますわ!!」

はじめの挨拶と皇太后と王妃へのお礼を終えてホッとしたのか、パーティーは表情を緩ませ嬉しそうに私に話しかけてくる。

そのあまりのはしゃぎぶりに頭を撫でたくなる衝動を堪えつつ笑みを返す。

「それじゃあ、まずは立食スペースに行ってみようか」

お茶会の会場はテーブル席と立食スペースが用意されており、それぞれの場所が好きないように過ごしていくなっている。

交流を目的としていることから、席も主催者であるシーヘルビー国のメンバーと私たちのみ固定で、他の皆は特に指定されていない。好きな席に座っていいいし、途中で席を移動することも自由だ。

折角座ってじっくり話したい相手がいても、席が離れていてはどうしようもないからね。

その辺のことは、なぜそういう形にしたのかという意図も含めて事前に配られた招待状に記載されているし、お茶会が始まる前にも説明した。

こういった説明を怠ると、今回のように身分の高い人が来る場では「なぜ自分の席がない!」と怒り出す人が出ることもあるから要注意なんだよね。

「ティアのおすすめはどれだい?」

立食スペースの一角に並べられたお菓子を前に、目をキラキラさせているパーティーに話しかける。

お菓子を前にした時の彼女は、本当に子供みたいで可愛い。

「えっとですわね、その果物がのったケーキとか、そちらのクッキーとか……ああ、あつちのゼリーもおすすめですわ!!」

一生懸命話すパーティーの言葉に耳を傾けつつ、近くに控えているメイドに彼女が指定したものを皿に盛るように指示する。

「あっ！ 違いましたわ!! それは私の好きな『おすすめ』でしたの。セシル様にはそちらのココアを練り込んだクッキーや『ポテトチップス』がおすすめですわ!!」

「……『ポテトチップス』?」

聞いたことのないお菓子の名前が出てきたね。

それになんだか私の勘が強く訴えてきている。

……これはパーティーの前世の知識を基にしたお菓子だと。

「そうですわ！ これは作り方が簡単でしたので、私でもしっかりと覚えていましたの！ 今回のお茶会には男性も出席されるので、甘くないお菓子をお出ししようと思ひ、提案してみたのですわ」

「……なるほどね」

胸を張って話すパーティーに苦笑が浮かぶ。

女性だけのお茶会であれば、高価な砂糖をふんだんに使った、甘くて可愛いお菓子が好まれる。

甘くないものとして、サンドイッチなどを出す場合もあるが、全体としては数は少なめだ。

しかし、今回のお茶会は男女問わず参加してもらうものだ。

男性でも甘いものが好きな人は当然いるが、好まない人や恥ずかしがって食べようとしない人も多い。

きつとその人たちのために、軽食になりそうなものを多めに揃えたり、『ポテトチップス』とかいう甘くないお菓子を用意したりしたのだろう。

まあ、それはいいよ。

それはいいんだけど……こうやって不用意に前世の知識をお披露目するのはやめようか？

君の付加価値が高まりすぎると、余計なものまで引き寄せてしまいそうで心配だよ。ましてや、ここは国外だ。

常日頃君を守っている令嬢たちも、何かあった時に私がフォローに走らせている有能な側近たちもいつもより少ないんだよ？

ただでさえ目や手が行き届きにくい状態なんだから、パーティー自身も気を付けてくれないと困る。

これは後で注意しておいたほうがいいかも……

「セシル様、これがポテトチップスですわ！ ジャガイモを使って作っていますの。とても美味しいので食べてくださいませ」

パーティーが、メイドが皿に盛った黄金色の薄くてシンプルなお菓子を一枚、手でつまんで私に差し出してくる。

……まあ、パーティーはパーティーだしね。私が気を付けておけばいいかな。

「それじゃあ、いただくとするかな」

パーティーが差し出したそれを口に入れると、バリツと小気味いい音が鳴り、ほどよい塩味が口の中に広がった。

うん、これは確かに美味しいね。

我が国にもジャガイモを名産とする地域はいくつかあるから、広めてみようかな？

そう考えると、これだけ多くの国の人たちが集まっているこの場でお披露目で



きたのは良かったのかもしれない。

国外向けのいい宣伝になるからね。

「どうですか？ セシル様？」

『ポテトチップス』の今後の展開について思案しつつ味を楽しんでいると、パーティアが不安そうに顔を覗き込んできた。

「うん、凄く美味しいね。この食感がいいよ」

「良かったですわ!! どうも皆様あまりお食べになっていないようでしたので、(この世界の方には) お口に合わないのではないかと心配していましたの」

ホッとした表情を浮かべるパーティアの言葉を聞き、周囲に視線を走らせる。

大勢の人の目が私たちに向いていた。

……私たちに話しかけるタイミングを窺^{うかが}っている人たちとは別に、私の『ポテトチップス』への反応を見ている人たちもちらほらいるようだ。

顔を赤くしているのは……パーティアが私に食べさせるところを見て照れている感じかな？

「それは多分、口に合わないとかいう以前に、このお菓子のことがよくわからなくて不安なんだと思うよ」

「え？ 『ポテトチップス』ですわよ？ 見るからに美味しそうですわよ？」

私の言葉に驚いた様子のパーティアだったけれど、その後、周囲を見渡し、『ポテトチップス』を食べた私の反応を気にしている人たちがいることに気付いて、不思議そうに首を傾^{かし}げる。

「ティア、それは君がこれの味を知っているからだよ。知らない人からすると、これは見たことのない物体なんだ。……一度食べたならその美味しさに病みつきになるかもしれないけれどね」

ニコツと笑って、パーティアが手にしている皿から『ポテトチップス』を一枚摘まみ、彼女の口元に持っていく。

パァアッと顔を明るくしたパーティアが、嬉しそうに私の差し出した『ポテトチップス』をバクリツと口にし、幸せそうな笑みを浮かべた。

なんて美味しそうな顔をするんだろうか？

彼女の顔を見て、つい私ももう一枚『ポテトチップス』を口にする。

……ザワァツ。

小さなざわめきと共に、周囲の人々の視線が『ポテトチップス』に向いた。

そして、一番近くにいた男性がゴクリツと唾を呑み、勇気を出してメイドに『ポテト

チップス」を取り分けるよう指示する。

「う、美味い!!」

その男性が恐る恐る『ポテトチップス』を口にし、その美味しさに感動すると、後は争奪戦だった。

様子見していた人たちがこぞって『ポテトチップス』に群がる。

『ポテトチップス』の取り分けを担当していたメイドがてんでこ舞いになって、他のメイドが応援に来たほどだ。

「え？ あれ？ 皆様、急になんで？」

折角の美味しいお菓子を皆に食べてもらえないかもと少し残念そうな顔をしていたバーティアが、驚いた様子でその光景を見つめる。

「ティアは食べ物を本当に美味しそうに食べるから、君の『美味しい』という気持ちが彼らにも伝わったんだと思うよ」

残念ながら、私は美味しいものを食べても、まずいものを食べても、あまり表情が変わらないらしい。だから、私が「美味しい」と言っても、バーティアが満面の笑みで食べている時ほどは周囲の関心を引けない。

最初に食べた男性も、私が「凄く美味しい」と言った時はまだ様子見だったのに、

バーティアが食べた途端チャレンジしたしね。

目新しいものを口にするのは勇気があるけれど、一度口にして美味しさを実感してしまえば、美味しくて珍しいものを食べたという自慢になる。

そして「美味しい」と感じた人が多くなればなるほど話題になり、食べた経験があること自体が流行の先端をいくことになるのだ。

王侯貴族にとつて、こういった流行りというものは意外と馬鹿にできない。

流行りを生み出すことはステータスに繋がるし、そういった情報をきちんと得ておくことは、社交界の話題に乗り遅れないために大切なことだ。

さらに言えば、それらの情報を得られているかどうかでその人の情報収集能力がどの程度なのか推測できるし、人気で品薄なものを入手できるかどうかで人脈の幅もわかる。

もちろんそれがすべてとは言わないが、多少なりともメリットになる可能性があるものが目の前に転がっているなら、拾っておいたほうがいいと考える人は多いだろう。

……それに、食べておけばこの後バーティアに話しかける時のいい会話のネタになるしね。

「よくわかりませんが、皆様が美味しいと喜んでくださったなら嬉しいですわ!」

自分が引き起こした状況だというのに、パーティーはいまいちわかっていないようだ。きっと自分の影響力を軽視しているからだろう。

まあ、でも自分が準備したものを「美味しい」と言って笑顔で食べる人たちを見るのは嬉しいらしいから、それはそれでいいのかもしれない。

「バ、パーティー様」

二人でお皿の『ポテトチップス』をちょうど食べ終えたタイミングで、ジューン嬢がパーティーアに声をかけてきた。

私が隣にいることで緊張しているのか、少し表情が硬い。

「まあ、ジューン様！ 今回はお茶会の準備を手伝ってくださってありがとうございます」

メイドから受け取った手拭きで手早く指先を拭ってから、パーティーアが嬉しそうにジューン嬢のほうを向く。

ジューン嬢は、パーティーアのいつもと変わらない様子にホッとしたように表情を緩め、笑みを浮かべた。

「ジューン嬢、私からお礼を言わせてくれるかい？ 妻の我儘に付き合ってくれてありがとう」

パーティーアの隣に並び、私からも声をかけることで彼女のことを私も歓迎していると伝えると、ジューン嬢はさらに安堵したようだった。

それにしても……

パーティーアと話し始めたジューン嬢に気付かれないように、視線だけで周囲を見回す。……イズラーチ王子は来ていないようだね。

王宮内で行われる、王太子の結婚式参列者を招くお茶会だ。もちろん、王族であり、王太子の甥にあたるイズラーチ王子にも招待状は送られている。

けれど、彼の姿はない。

あれだけ婚約者であるジューン嬢が構ってくれないと寂しがっていたくせに、そのジューン嬢が準備を手伝ったお茶会に参加しないなんてね。

ああ、そういえば、無意味にこのお茶会に対抗意識を燃やしていたイズラーチ王子の兄——第一王子のラムタク王子がちょうど同じ時間帯に男性のみを招待した食事を催しているんだっけ？

そのせいもあり、会場内に男性は少ない。

……まあ、『女性に比べて』少ないというだけで、それなりの人数はいるから、向こうの食事会の参加者が少ないことは容易に想像できるけどね。

このあたりは、パーティアたちが招待状を送った後にラムタク王子が動き出したという時間的要因と、こちらに参加する王族の多さ、それに今回はあくまでアレイス王太子とリソーナ王女の結婚式を目的として集まっているのだから、普通に考えればこっちが重要だと皆考える。

こんな簡単なことが、なぜラムタク王子はわからないのだろうか。心底疑問に思うけれど、わからないものはわからないのだから仕方ない。

今頃あまりの参加者の少なさに恥をかき憤怒（ふんぬ）しているだろうけど、それは自業自得というものだ。

そんな彼の食事会だが、実は私にも招待状が届いていた。

もちろん、パーティアのパートナーとしてこのお茶会に出ることが決まっている私が出るはずもなく、即お断りの返事をした。

だが、もしかしたら、イズラーチ王子はジューン嬢のことなどそっちのけで、こちらに出たのかもしれない。

……なんて思っていたら、イズラーチ王子の姿を見つけてしまった。

お茶会が開かれている庭園から少し離れた、渡り廊下の柱の陰に。

嫉妬しているのか、悔しそうな表情で、ジューン嬢と楽しそうに会話をしているパー

ティアを睨（にら）んでいる。

彼は一体何をしているんだろう？

そんなにジューン嬢を取られるのが嫌なら、さっさとこちらに来て彼女のエスコートをすればいいのに。

彼にだって招待状は送られているのだし、このお茶会は途中参加も途中退出も自由になっている。

今から参加することに何の問題もないはずだ。

それともまだ、あの『男としての立場』とか『女なのに男を立てないなんて』とかいう固定観念に囚われて、動けずにいるのだろうか？

そんな何の役にも立たない思い込み、さっさとゴミ箱に入れて焼却処分してしまえばいいのにね。

「そういえばジューン様、イズラーチ王子殿下はやはり出席なさいますんの？」
パーティアが眉尻を下げ、ジューン嬢を気遣う様子で尋ねる。

「ええ、そのようですわ。……事前に招待状を手渡ししましたけれど、結局お返事はこなくて。昨日、学園でお会いした時に再度お声がけしたのですが、『行けるかどうかかわらない』と言われてしまいました……。今日、お姿がないところを見ると、来る気が

な……来れなかったのだと思います」

今、ジューン嬢から一瞬苛立ちのようなのが発せられたのは気のせい……ではないだろうね。

ああ、本当にイズラーチ王子は一体何をしているのやら。

大切な人をこんなに苛立た……悲しい気持ちにさせるなんて。

ここは、少々強硬手段に出たほうがいいかな？

「ねえ、ティア。私はあの柱の陰に隠れている遅刻参加者を捕まえてくるから、君は何事もなかったかのように、ここでジューン嬢と話をしてくれませんか？」

こっそりとバーティアに告げると、彼女は意味がわからないとでもいうように首を傾げた。

ただ、私が内緒で動きたいということは察したのか、口元を手で隠して声を潜めて尋ねる。

「え？ 柱の陰？ 遅刻参加者？ どういうことですか？」

「どうも遅れてきて気まずくて入れないようだから（強制的に）連れてくるよ。気付かれたとわかれると恥ずかしがって逃げてしまうかもしれないから、ジューン嬢には何も告げずに二人で会話を続けていて」

そう言って、チラッと視線をイズラーチ王子が隠れている柱のほうに向ける。

私のその仕草を見て、バーティアも気付かれないようにそちらを見る。

そして、そこにイズラーチ王子の姿を見つけた瞬間、彼女の表情がバァアツと明るくなった。

「バーティア様、どうなさいましたの？ あちらに何かありましたか？」

不審に思ったらしいジューン嬢がバーティアの視線を追おうとする。

「ちよっ！ 違いますの!! 私のお気に入りのケーキが出ていたんだったと思ひ出ししましたの! それでどこかなあって思ったのですけれど、あちらにありましたわ!! あちらです!! そちらではありませんわ!!」

ジューン嬢がイズラーチ王子のほうに視線を向けられないよう、バーティアが必死で誤魔化し始める。

そして、彼のいる方向とは反対側に視線を向けさせようとジューン嬢を必死で促した。ジューン嬢はバーティアの必死さに驚いてはいたけれど、バーティアのお菓子にかけると執念を知っているせい、特に疑うこともなく「見つかつて良かったですね」と微笑む。

「それなら、ティアは好きなケーキを取っておいで。私は軽食を取ってくるよ。ジュー

ン嬢、悪いけれど、しばらくティアに付き合ってくれるかい？」
「もちろんですわ」

快く了承してくれたジューン嬢の背中を押し、バーティアはケーキの置かれている場所へ向かう。

途中、一度だけ私のほうを振り返り、「頼んだ」とでも言うかのようにコクツと頷いていった。

残された私は、他のお茶会参加者が私に話しかけるタイミングを見計らっているのをひしひしと感じつつ、笑顔で防衛してさっさとその場を離れる。

……確か、あの廊下には向こうからも回れたはずだね。

頭の中に建物の構造を思い浮かべて、イズラーチ王子に気付かれないように近付くための最短ルートを考える。

「……ゼノ、もし彼が建物の中に逃げ込みそうになったら、退路を塞いでくれる？」

いつの間にか私の背後に立っていたゼノに小声でそう伝えると、「臨時手当は出ますか？」と聞くので「出ないよ。これは通常業務内だよ」と宣言しておいた。

「やあ、イズラーチ王子。こんなところで一体何をしているんだい？」

用事があるふりをしてさりげなくお茶会会場を離れ、建物の裏側に回り込んだ私は、

ジーツとジューン嬢とバーティアを見つめているイズラーチ王子に背後から声をかける。

「ひっ！ な、な、な、なんでセル殿下がここに!？」

急に後ろから声をかけられたせいか、イズラーチ王子はまるで幽霊でも見たかのように大きく体を跳ねさせ、振り返って私を指さす。

どうでもいいけれど、人を指さすのはあまり良くない行為だよ。

小さい頃に習わなかったかい？

「ん？ 君の姿を見かけたからね。一人じゃ気まずくて会場に入れないみたいだから、迎えに来てあげたんだよ」

ニッコリと笑顔で答えると、なぜか彼は顔を引き攣らせて半歩下がった。

「わ、私は別にお茶会に出るつもりなんて……」

「じゃあ、ここで一体何をしていたんだい？ 何も用事がないのに女性を柱の陰から

ジーツと見つめているなんて、あまり褒められた行為ではないと思うけれど？」

もちろん、仮に用事があったとしても、長時間声をかけずに見つめていれば引かれることは間違いないけれどね。

「そ、それは……」

とつさに上手い言い訳を思いつかなかつたらしく、彼は俯いて黙り込む。
 普段『男らしさ』を気にするくせに、なんでこういうところは男らしくないんだろ
 うか？

「……ジューン嬢、君が来ていないことを残念がっていたよ？」

本当は「残念がる」というよりも「苛立っていた」のほう为正しいんだけど、そこ
 を敢えて言う必要はないだろう。

「ほ、本当ですか？」

俯いていたイズラーチ王子が私の顔を窺うように見つめてくる。

男性に上目遣いで見つめられてもあまり嬉しくないんだけど……まあ、今は突っ込ま
 ないことにしておくよ。

彼も不安なのだろうし、虐めすぎて自信をなくして逃げられても面倒だからね。

「ああ、本当だよ。大体、昨日も彼女に出席について尋ねられたんだろう？」

さつきバーティアとジューン嬢が話していた内容を思い出してぶつける。

すると、彼は気まずそうに視線を逸らして「そうですね……」と呟いた。

「皇太后や王妃は最初から前王や国王にエスコートしてもらう気なんてなかったようだ
 し、前王も国王も今日は仕事で忙しくて来られないそうだから、たいして寂しくはない

のだろうけれど、君は違うだろう？ 折角何度も誘ったのに、理由も、明確な返答もな
 く来てもらえないのは寂しいと思うよ」

「それは……」

イズラーチ王子は口を開いたものの、やはりちゃんとした言い訳は出てこない。

単純に、彼はジューン嬢があまり相手をしてくれなくなったことに拗ねて、冷たくし
 ているだけなのだから、当然だ。

「あまりそういった態度を続けると、本当に彼女に愛想を尽かされてしまうよ？」

「そ、それは困ります！ か、彼女は私の婚約者で、未来の妻なのですから!!」

イズラーチ王子は血相を変えて言うけれど……それ、私に訴えても意味がないか
 らね？

「だったら、きちんと態度で示さないと。婚約者だ未来の妻だといっても王侯貴族のほ
 とんどは政略結婚だ。自分たちでしっかりと関係を築いていかないと、表面だけの関係
 になってしまうことだってあるんだからね」

「け、けれど女性の尻を追いかけるような行為は……」

「誰もそんな話はしていないよ。ただ、誠意を持って接しろと言っているんだよ。妻や
 婚約者というのは、私たちを支えてくれる、大切に重要な存在なんだよ。当然、一人の

人間として尊重し、大切にしないといけない。大切にしないと……大切にしてもらえないよ?」

「うっ……それは嫌です」

確かに一方的で献身的な愛だつてあるかもしれないけれど、人間いくら愛情を注いでも、まったく返してもらえず不誠実な態度ばかり取られていれば、その想いも枯渇する。そうなれば、「やらなくてはいけないこと」は貴族の妻の義務としてするかもしれないけれど、夫のために妻として「やったほうがいいこと」はどんどんやらなくなる可能性がある。

自分を蔑^{ないし}ろにする相手のために何かしようなんて思えなくなるからね。

「君は彼女のために、兄君が主催する食事会を欠席してここに来たんだろう? それならば、最後のひと踏ん張りをしないでどうするんだい?」

「あ……確かに……そうです……ね」

消え入りそうな声ではあつたけれど、それでも彼はきちんとこのお茶会に出て、ジューン嬢をエスコートする決意を固めたようだ。

ついでに言うと、やっぱりラムタク王子の食事会はすっぱかしてきたみたいだね。

この兄弟は、決して仲が悪いわけではないようだけど、だからと言って仲がいいわけ

でもないみたいだ。

感覚的には、ラムタク王子がイズラーチ王子を自分のように扱ひ、イズラーチ王子はその辺のことをあまり気にせず適度な距離で接している感じだと思う。

要するに、ラムタク王子が一方的に子分認識しているだけで、イズラーチ王子はまったく気付いていない片思い状態だ。

……イズラーチ王子、その辺は鈍そうとか興味なさそうだしね。

「それなら、さつさと会場に入るよ。私も君を迎えに来るために、ティアを置いてきているからね。早く戻りたいんだ」

「……セシル殿下はバーティア妃殿下を大切にしておられるんですね」

「当然だよ。彼女は私の『運命の乙女』だからね」

堂々と言い切る私に、イズラーチ王子は少し驚きつつも、小さな声で「男らしい……」と呟いた。

会場に戻る途中、言い訳に使った「軽食を取ってくる」という言葉を実行するために、適当なものを見繕^{みづろ}ひ、メイドに盛り合わせてもらう。

私の後をついてきたイズラーチ王子は私の行動を見て首を傾^なげていたけれど、事情を

説明すると納得し、自分もメイドに指示して軽食を盛り付け始めた。

二皿用意しているあたり、きつと自分とジューン嬢の分だろう。

「ティア、ジューン嬢、お待たせ。軽食とお土産を持ってきたよ」

立食スペースにあるテーブルに陣取り、満面の笑みでデザートを堪能していたバーティアとジューン嬢に声をかける。

「まあ、セシル様お帰りなさいませ！ それにようこそ、イズラーチ王子殿下!!」

バーティアは私の後ろにイズラーチ王子の姿を見つけると、それはそれは嬉しそうに迎えた。

肝心のジューン嬢は目をバチバチとさせ、私の背後で照れくさそうにしているイズラーチ王子を凝視^{ぎょうし}している。

「……イズラーチ様、来てくださったんですか?」

「き、君が来てほしそうにしていたからね！ だから、ちょっと顔を出してあげようかと思って!!」

口調は上からなのに、顔は赤く、視線を逸^そらしていることで、全然偉そうに見えない。彼とは長い付き合いのジューン嬢は、それだけでおおよそのことを察したのだろう。

苦笑しつつも、どこか嬉しそうにしている。

「最近、ジューン嬢がティアの相手ばかりしているから拗^すねていたようだ。会場を遠くから眺めるばかりでなかなか入ってこようとしないから、連れてきた」

「セ、セシル殿下、それは内緒!!」

私がサラッとばらすと、イズラーチ王子はさらに顔を赤くして、慌てて止めてくる。「ああ、ごめんね? ついうっかり口が滑ってしまった」

ニコツと笑って答えると「全然反省していませんね」と恨みがましい視線をイズラーチ王子から向けられた。

もちろん、こうなるとわかった上でやっていることだから気にしない。

「まあまあまあ! 私に嫉妬^{しど}するなんて、イズラーチ王子はジューン様のことが大好きなんですのね!!」

そうこうしているうちに、意図的にやっている私とは違い、無意識に相手の痛いところをつくバーティアが追撃をする。

「ち、違っ!」

「え!? 違いますの!? まだ、ただの幼馴染^{おきななしみ}としか思っておりませんの!?」

「違う! そうじゃなくて!! いや、違うない? いややっぱり違う!!」

「ど、どっちなんですか!? 攻略具合は今どこまでいってますの!? 私、パニックです」

わ!!」

「私のほうがパニックだ!!」

バーティアの指摘に顔を真っ赤にして混乱するイズラーチ王子。

そして、そんな彼を見て一緒に混乱するバーティア。

それにしてもバーティア、今回のお話は『乙女ゲーム』じゃなくて『小説』だって言っていたよね? 『攻略具合』って『ゲーム』関連の言葉じゃないのかな?」

「あの、イズラーチ様? ど、どうなさったのですか?」

二人のやり取りに困惑しつつも、話題が自分への好意についてだということは察しているのだろう。頬をうつすらと染めたジューン嬢が、頭を抱えてしまったイズラーチ王子に声をかける。

「と、とにかく! 君は私のそばにいればいいんだ!! 幼馴染だろうとそれ以上だろうと、私の隣は君のものなんだからな!! 君以外は駄目なんだからな!! ……私も君にもう少し気を遣えるように頑張るから」

イズラーチ王子は、最後はそっぽを向いて不貞腐れたように呟いていたけれど、今の彼なりの気持ちを混乱に乗じて口にできたようだ。

なるほど。彼は気持ちの準備をさせて勇気を出させるよりも、こうやって混乱に乗じ

させたほうが早いタイプなんだね。

そういえば、先日私とラムタク王子が飲んでいるところに突撃してきた時も、結構暴走している感じだったしね。

もう必要ないかもしれないけれど、なんとなく彼の取り扱い方法がわかったような気がするよ。

「うん、なんかいい感じにまとまったみたいだね」

イズラーチ王子の告白(?)を聞いて、口に手を当てて驚きつつもどこか嬉しそうなジューン嬢。

多分、イズラーチ王子だけでなく、ジューン嬢の思いもまだ恋愛にまでは育ちきっていないのだろうけれど……この感じだと時間の問題だろうね。

「あ、あの、イズラーチ様、この後、私のエスコートを……」

赤い顔でおずおずとお願ひするジューン嬢。

「と、当然だよ。き、君は私の婚約者なんだからね。君のエスコート役は私しかないんだから」

そんなジューン嬢の申し出が嬉しいくせに、素直になれずにぶっきらぼうに了承するイズラーチ王子。

なんだか凄く甘酸っぱいよ。
ちよっと、この場にいつらいレベルで。

「ねえ、ティアア？」

「あっ！ そうですわね!!」

小さく名前を呼ぶと、すぐ私の意図に気付いたバーティアが何度も頷く。

「後は若い二人に任せてつてやつですわね!!」

「いや、それはよく意味がわからないけれど……折角の機会だし、私たちも他の方たちと話をしたいから、彼らとは一旦別行動にしようか」

「同感ですわ!」

ニッコリ笑ったバーティアに小さく頷き返して、ジューン嬢たちに移動することを伝える。

「長い時間お引き止めしてしまい、申し訳ありません」

ジューン嬢がイズラーチ王子の隣ですまなそうな顔をする。

「いや、私がティアの相手をしてほしいと頼んだのだしね。こちらこそ悪かったね」

「ジューン様、楽しい時間をありがとうございましたわ! また後で、皇太后様や王妃様、リソーナ様たちと一緒にお話をする予定ですので、良かったらお二人も来てくださ

いませ!!」

別れ際に、バーティアがジューン嬢たちを誘う。

私たちも、皇太后や王妃に誘われている身だけど、彼らになら声をかけても問題ないだろう。

まあ、準備の問題もあるかもしれないから、一応事前にゼノを通してお伺いは立てておくけれどね。

「ええ、是非。……私一人では気後れしてしまいそうでしたけど、イズラーチ様も一緒になので」

傍らに立つイズラーチ王子の腕にソツと手をかけるジューン嬢。

その仕草をチラッと見た後、すぐに視線を逸らしたイズラーチ王子はどこか満足げだ。

「まあ、ジューンが母上たちと話がしたいというなら、付き合ってやるよ」

「ふふ……。ありがとうございます」

幸せそうな二人と別れ、私たちは会場を移動した。

ジューン嬢たちと別れてからは、面倒な社交の時間が待っていた。

元々、アルファスタ国の王太子夫妻である私たちと話したがる者は多い。

さらに、このお茶会はバーティアの、他国の方々と交流を持ちたいという希望によって開かれたということになっているから、参加者が私たちに声をかけるハードルもグッと下がっている。

会場を歩いていると、当然、次々に声をかけられる。

「アルファスタ国の王太子ご夫妻とお話できるなんて感激ですわ!!」

「このような素晴らしい機会を作ってくださったバーティア妃殿下には、とても感謝しております」

「先ほど、あちらで『ポテトチップス』という、とても美味なお菓子を食べたのですが、あれはバーティア妃殿下がご考案されたとか。さすがですね!!」

次から次へとかけられる声に、バーティアと共にこやかに対応する。

まあ、正式な謁見^{えつけん}の場や会議の場ではないから、顔つなぎ程度の会話を一言二言交わ

せばいいだけだ。少々疲れはするが、作業としてはさほど大変ではない。

それよりも深刻なのは……

「私もお会いできて嬉しいですわ!!」

「まあ、そう言っていただけで嬉しいですわ!!」

『ポテトチップス』、気に入っていただけたのですわね! リソーナ様にご提案してみても良かったですわ」

人に話しかけられたら、しっかりと返事をする、ということが身についているバーティアだ。

先ほどから大好きなケーキを食べたいのに、口に入れる暇がなくて、フォークを上げ下げし続けている。

人と話すのが好きな彼女のことだ。話しかけられるのは嬉しいんだろうけれど、目の前に美味しそうなお菓子があるのにまったく食べられないという状況に、徐々に纏^{まと}うオーラが物悲しいものになってきている。

敏い人間はバーティアのその様子を見て、手短かに会話を終えてくれたり、口に入れる間を与えようとするのだけれど、そうでない人間も一定数いる。

少しでも私たちに印象を残そうと、べらべらと喋り続ける者や、私たちの反応を気

にするがゆえに頻繁に同意や返答を求める者。結局、敏い人間が引けば引いただけ、敏くない人間が寄ってくるという状況になってしまった。

相手がどの程度空気を読めるかを判断する基準としてはとても役立つんだけど……そろそろ切り上げないと私の妻がお菓子不足で枯れてしまいそうだね。

「ティア、どうしたの？ 少し疲れたのかい？」

「い、いえ、私は……」

若干俯^{うつむ}きがち……というか、手元のケーキを見つめる時間が長くなってきたバーティアにそつと声をかける。

ちようど今話していたのは、敏いほうの人間だから、これだけでおおよその意図は察してくれるだろう。

「おや、申し訳ありません、バーティア妃殿下。お二人とお話しするのがあまりに楽しく、お引き止めしすぎてしまったようだ」

「バーティア様は人気者ですから、ずつと話しっぱなしでお疲れになったでしょう。どうぞ休憩なさってくださいませ」

ご夫婦で話しに来ていた、シーヘルビー国の近くにある島国の王族夫妻は、にこやか

に私たちを送り出してくれる。

さらに夫人の機転のきいた声かけのおかげで、これから私たちが休憩に入ることが周囲に伝わり、周りで待機していた者たちも残念そうにしつつも離れていった。

「お気遣いありがとうございます。お二人の国には大変有用な作物が多数あるようですし、是非今後ともいいお付き合いを」

ニツコリと笑って、男性と握手を交わす。

バーティアも笑顔で夫人に感謝を告げ、「是非またお話しさせてください」と良好な関係を求めていることをアピールしていた。

……このお二人の国では、良質なカカオが取れる上に、バーティア曰^{いわ}くそれ以外にもお菓子作りに役に立つものがたくさんあるらしい。

要するに、バーティアにとってはとても好ましい国なのだ。

これで、国が荒れていたり、外交を担当するこの二人の力量が求めるものに達していなかったら少し考えものだけれど、どちらも問題なさそうだから今後の繋がりを得ていたほうがいいだろう。

共同開発という形で新しい名産品を生み出すことができれば、お互いにとってメリットになるしね。

「……や、やっとこのケーキが食べられますわ」

私たち用に準備されていたテーブルに戻り腰を下ろすと、パーティアはちよつとぐつたりしつつも、ずっと食べられずにいたケーキを嬉しそうに頬張り始めた。

その様子を見て、会場の端に控えていたアルファスタの侍女たちがこちらにやってきてお茶を淹れてくれる。

「リソーナ王女たちはまだ戻られていないけれど、もう色々な人と話せまし、私たちはしばらくここでのんびりすることにしようか」

この後には、皇太后と王妃と話をする予定もある。

私も話し疲れたし、目星をつけていた人たちとは全員話すことができた。

これ以上、頑張る必要もないだろう。

「そうですね！ 結婚式当日も、多くはありませんが話せる時間はありますもの」

私の言葉に、パーティアが嬉しそうに同意する。

おそろく、お菓子が食べたいのだろう。

今日のために、朝、室内で行う運動も欠かさずに頑張っていたし、食事もセーブしていたみたいだから、ここは敢えて何も言わずに見守ることにしよう。

ニコニコと笑顔でお菓子を食べるパーティアを、小動物を観察するような気持ちで眺

める。

そうしながら私も侍女が淹れたお茶を飲んでみると、学生時代から私の側近候補であり、今は執務補佐官をしているクールガンがやってきた。

彼には、他国の情報収集を頼んでいたため、お茶会には参加していたものの別行動を取っていた。

おそろく、経過報告に來たのだろう。

「セシル殿下、パーティア妃殿下、お疲れさまでした」

「クールガンもお疲れさま」

「お疲れさまですわ！ クールガン様も美味しいお菓子を召し上がりました？」

「ええ、妃殿下が考案されたという『ポテトチップス』もいただきました。とても美味でした」

頭を下げたクールガンを、私とパーティアがにこやかに迎える。

パーティアも親しいクールガンの前では、菓子やお茶を楽しみながら話せるようだ。

「何か変わったことはなかった？」

「大きなことは特に。ただ……」

「ただ？」

クールガンが内緒話をするように、私に近付き、腰を折って耳元で口を開く。
その時だ。

「まあ！ これはこれはアルファスタ国のセシル殿下!! お噂はかねがね伺っていますわ!! とても優秀で素敵な殿方だとか。私はウミューベ国の第八王女、ビストーナ・ウミューベと申しますわ」

突然現れた、どことなくリソーナ王女に顔つきの似た、やたらと胸を強調した服装の女性が私に話しかけてきた。
そう。私だけに。

「……クールガン？」

「……ただ、結婚式に参列されるためにウミューベ国からお越しのリソーナ王女の妹君、ビストーナ王女が、会場で地位の高い男性を中心に男漁りをしておられました」

「……なるほどね」

ビストーナ王女の挨拶とも言えない挨拶を笑顔で受けつつ、小声でクールガンに状況を確認すると、予想通りの返答が返ってきた。

それにしても、私は既婚者なんだけども。

しかも現在、愛しい妻が隣で美味しそうにお菓子を食べている真っ最中である。

さて、どうしたものか。

ヒロニア嬢の時と違い、相手は王女で尚且つパーティアの友人の妹だ。

もの凄く無視したいけれど、そうもいかないだろう。

「これはこれはご丁寧に。私はアルファスタ国王太子、セシル・グロー・アルファスタ。そしてこっちが妻のパーティア・イビル・アルファスタだ。姉君のリソーナ王女とは妻が親しくさせていただいているよ」

「ビストーナ王女様、はじめましてですわね。パーティアですわ。リソーナ王女とは仲良しですの」

私が立ち上がり挨拶を始めると、パーティアもそれに合わせるようにお菓子を食べるのをやめて、席を立つ。

私が挨拶している時は上目遣いで妖艶な笑みを浮かべていたビストーナ王女だけれど、妻の紹介に移った途端、眉間に皺が寄った。

さらにパーティアが話し始めると、パーティアを睨むように見る。

……君、いくらなんでも露骨すぎないかい？

ウミューベ国の王族教育は大丈夫かな？

「まあ、妃殿下もおられたのですね。あまり会話をされていないご様子でしたので気付

きませんでしたわ」

またもの凄く直球な嫌味を投げ込んでくるね。

もちろん、そんなものは私が全力で打ち返すけれどね。

「妻は美味しいものが大好きで、私は幸せそうに食べる妻を見ているのが好きだからね。今は会話自体が邪魔なんだよ。それに、会話なんかなくても、お互いがそばにいただけで私たちは幸せだからね」

ニコツと隣にいるバーティアに笑いかけると、バーティアははにかみつつも嬉しそうに「そうですわ」と答えてくれた。

うん、うちの妻は可愛いね。

そして……ビストーナ王女は怖い顔をしているね。

「あらあら、惚^{のろけ}気られてしまいましたわ。幸せそうで、なんて羨ましいこと。側室という形でもいいので、私もセシル様の愛情の一端をこの身に受けてみたいものですわ」

明らかにバーティアに対してイラついているくせに、すぐに立て直して私に流し目を送ってくる。

こんなのにつっかかる男なんているのだろうか？

「ハハハ……。ビストーナ王女はとてもユニークだね。でも残念ながら我が国に側室制

度はないんだよ。王侯貴族も愛する女性は一人数だけだ。それに、私の愛はすべてティアのものだしね」

満面の笑みを返し、バーティアの肩を抱いて引き寄せる。

「セ、セシル様!？」

恥ずかしそうに俯^{うつむ}くバーティアの頭にソツとキスをして、私たちが仲睦まじい夫婦であることを見せつけると、ビストーナ王女は急に白けた目になった。

……側室制度がないと知って、私が獲物にならないとわかったんだらうね。

「まあ、そうでしたの。あら、そちらの男性はどなたでしょうか？」

私を狙えないとわかった途端に、私の傍^{かたわ}らに立っているクールガンに視線を向けるビストーナ王女。

どうやら、彼女の心臓は銅でできているようだ。

「彼はクールガン・デレス・ウラディール子爵。私の側近だよ」

「まあ、お若いのに既に子爵位を継いでいらっしやる王太子殿下の側近様ですのね」

私の紹介にビストーナ王女の目が鋭く光り、クールガンが半歩下がった。

「クールガン・デレス・ウラディールです。以後お見知りおきを」

涼しい顔^{あたま}で挨拶はしているけれど、明らかにお見知りおきされたくないさそうなオーラ